

児童文学の探究

花岡 大学 著



■ 大阪教育図書刊 ■

著者紹介

一九一〇年、奈良県吉野郡大淀町佐名伝に生まる。龍谷大学文学部卒業後児童文学作家として活躍。現在「日本児童文学学会」「日本児童文芸家協会」「日本児童文学者協会」に所属。「近畿児童文化協会」「幼年文学懇話会」「幼年芸術の会」主宰。全国青少年教育協議会専門委員。京都女子大学助教授。龍谷大学・大谷大学・奈良文化女子短大講師。一九六一年「かたすみの清月」で小川未明文学奨励賞。一九六二年「ゆうやけ学校」で小学館文学賞を受けたほか著書多数。

児童文学の探究

昭和四十四年八月十五日 印刷
昭和四十四年八月二十日 発行
児童文学の探究 定価六五〇円

著者 花岡 大 学

発行者 横山 実

印刷者 岩岡 敏 志

発行所 大阪教育図書株式会社

東京都千代田区神田錦町三の十七

大阪市東住吉区田辺西の町六の四

郵便番号(東京)一〇一(大阪)五四六

振替(東京)五一〇四六(大阪)一一五五〇〇

©花岡大学一九六九・岩岡印刷・堀越製本

児童文学の探究・目次

1 児童文学研究

児童文学の概念規定に関する一考察——7

(一) 児童文学の定義——13

(二) 児童文学の発生——29

(三) 児童文学の目的——51

児童文学の特質論——63

(一) 児童文学的教育性——66

(二) 児童文学の興味性——84

(三) 児童文学の文学性——94

文学教育以前の問題——107

あるべき新しい児童文学の性格——116

2 瓦鶏記

燃えあがる炎のごときもの——127

年輪考——137

「勘」の世界——146

暗い雲のなかで——154

文学の弟子——167

文学の効用性ということ——175

前川康男氏への手紙——183

ある交友の一頁——197

被害者意識の重み——216

かわいそうな存在——226

空のメルヘン——237

一日の生活記——248

*

捨身の道・山本和夫——264

1

兒童文學研究

児童文学の概念規定に関する一考察

△はじめに▽

古い秩序や道德観念を、上から無理やりにこどもたちに押しつけ、こどもたちを画一的にひとつの鑄型におしこめることを、教育だと考えた過去の教育が（註1）児童文学作品はいうまでもなく、一般的に芸術のすべてを拒否した理由は、芸術というものが、既成の秩序や固定化した道德観念に対して、常に批判的、訂正的に働きかける力を持っていたからにほかならない。

だが今日の教育は、まったくそれとは逆に、まずその鑄型的画一性を打破するところから出発し、こどもたちめいめいの個性に即して、すでにおとなたちが創造してきた思想なり概念なりを踏台に、

みずからの力で新しい認識力を生みださせる人間形成を主眼とする方向に変貌した。

そうした人間形成への志向は、いうまでもなくすべての芸術が求めている方向と軌を一にし、そのかぎりにおいて、新しい教育における芸術の占める位置というものが、にわかに重要視されることとなった。

児童文学についてのみいえば、その作品を教育にとり入れるということが、さまざまな教育の実践系列のなかでも、もっとも有効な機能を持っていると考えられるのは、文学が内包している「教育性」というものが、たとえば科学教育において、その基礎知識を、知識として子どもたちに教え込むという段階を越えて、その精神を根底的に揺り動かす大きな力を秘めていることによって、直接子どもたちの人間形成に、緊密に結びつくものといっているからである。

この場合もちろん児童文学作品は、教育の手段であってよい。

だが児童文学もまた、純粹な文学の一つのジャンルであるかぎり、それ自体か価値追求の目的性を持っているものであり、したがってその内容は、おのすから作家の世界観や人生観によって人間が追求され、社会の矛盾面や醜惡面も、見落されることなく描き出されているものであって、何かの徳目にしたかつて、読者を訓練し、向上させることを目的として書かれたものでないということは、特に注意する必要がある。

何故ならば、教育者をも含めて、社会の児童文学に対する一般的通念は、児童文学というものをこともたちの表皮的な興味や関心に安易に妥協して、ただわけもなくこともたちをよろこばせ、さわがせることによって、漸進的に修身教育的方向へひっぱっていくことを目指した、興味的読物にしか過ぎないというふうに、誤って受け取られているからである。

なるほどそれは、わが国の児童文学の歴史か、いたって浅く（註2）、

すぐれた古典を持っているイギリスやドイツやソ連などで、児童文学が成人文学と同列に評価されているという現実（註3）とは、同格にはいくまいが、しかしそのことをよく自覚して、極めて積極的な努力を積み重ね、意慾的な制作活動を展開している、現在のわが国の児童文学運動の動向に照らしても、さらに文学が持っている基本的性格の点からいっても、すくなくともこどもたちに、直接的につながる教育者および父兄たちは、新しい教育を進展させるために、この際みずから進んで、その誤った一般的通念に、訂正を加えてもらわなければならない。

加えてもらわなければならない訂正とは、教育実践の場において、児童文学作品を利用する場合、それはまちがいのなく手段として利用さるべきものではあるが、しかしそれはある徳目にそって、作品のもつ夾雑物を勝手に除去したり、便宜的に都合のよいものを附加することによって、他動的にこどもたちをその方向に持っていこう

とするようなかたちでの利用の仕方であってはならず、あくまでも作品の持つ特性を生かして、すでにある作品群のなかから、そのこどもたちの発達段階に即応して、もっとも教育的だと思われるものを、つぶさに選別して与え、こどもたち自身がその文学的形象のなかで生き、自然や社会や人間についての考え方を、自律的に発展させていかせるといような方法で、利用されなければならないということである。

「その場合作品選別ということが、文学を利用する教育にとって、極めて重要なポイントになるわけで、その基準であるもっとも教育的だということは、いうまでもなくその作品が、文学の特性として内包している「教育性」を指し、したがってもっとも教育的だということ、その作品が高い「文学性」を持っているか、持っていないかということによって、決定づけられるということになる。」

それを見定めることは、作品評価の問題であり、正しい評価によ

ってまちがいなき選別基準を把握し、その教育実践を通じて、か
やかしい未来をつくることもたちの人間形成をおし進めていくため
には、だからなによりもまず教育者および父兄たちが、児童文学そ
のものに対して、まっとうな基本的認識を持つことが、なによりも
必要なことといわねばならない。

以下ここに児童文学の本質を検討し、その現在を批判して将来の
在り方を考察しながら、新しい概念を規定しようとするのは、もっ
ぱらそういう必要に答えようとする意図にほかならない。

註1、明治維新が、封建的なものを打ちくだいたというよりは、むしろ封建
的なものを「上からおしつけるという形」で、教育の理念をうち立てたと
いえる。その後第二次世界大戦の終るころまでのあいだに、もちろんさま
ざまな新しい教育思潮や制度や方法等についての運動が展開したこともあ
ったが、大局的には「教育勅語」を最高原理としての教育の方向は動揺す
ることがなく、教育というものはつねに文部省当局の示す鑄型に、画一的
にこどもたちを造型するということをもって終始したといえる。

註2、「児童文学の発生」において詳述

註3、イギリスにおけるラディアード・キップリング代表作∧ジャングル・ブック∨、ドイツにおけるエーリヒ・ケストナー代表作∧エーミールと探偵たち∨、ソ連のパンテレーフ代表作∧金時計∨など、それぞれの国において、むしろ成人文学の作家以上に優遇されている。

(一) 児童文学の定義

(児童文学が文学のなかの一つのジャンルとして、現在考えられているような概念で、おとなの文学と区別され、それを「児童文学」と呼ばれるようになったのは、昭和初期の童話作家連盟が結成された前後からである。(註1)

かく称呼の歴史はごく新しいが、現在考えられているような児童文学の概念の発生は、室町時代の「お伽草子」や、江戸時代の「草双子」「わらべものがたり」(註2)の説話的寓話的な内容から脱皮しようとして立ちあがった、明治中期の「お伽噺」と呼ばれる作品

活動に求めることが出来る。(註3)

以後「少年文学」「童話」「童話文学」などという称呼の変遷のなかで、特に大正初期の「赤い鳥」による画期的な文学運動(註4)によって、文学性が高揚されつつ、もっぱら近代文学の一つのジャンルに耐える質的向上を志向するさまざまな発達過程を経て、現代の児童文学の概念に到達したものである。

ところが現在のわが国においては、遺憾ながらその概念が、ほとんど「考えられているような形」には理解されていず、低い段階で混乱状態をつづけているというのが現状である。

その理由は、おそらく変遷した称呼に当然随伴してくるそれぞれ相異なる概念内容が、その発展にしたがって止揚されぬままに、根強く残存してきたためであろうと思われる。

なによりまず概念を言葉で探索し、誰もが納得するようにこれを定義づけるということは、極めて困難なことではあるが、児童文